

岡田恵舟ICC理事長が語る！

ICC が、今、何故、 4年制にこだわっているのか。 その理由と背景。

STEP 1

今から遡ること、25年前の1987年に、ICC創立者で初代理事長の岡田晃舟は、それまでの定時制短期教育に限界を感じ、全日制教育の導入を英断。当初は、2年制(1600時間)で始まった。その背景には、「日本のカイロプラクティック教育は、まずは、日本の“あ・は・き、柔整”らと同等、もしくは、それ以上でありたい」と云う初代理事長の信念に基づいていた。その6年後の1993年には、“あ・は・き、柔整”の国家資格化に合わせ、全日3年制(2400時間)に移行。その後、3年制は、15年間に亘り継続。延べ400名を越える和製カイロプラクターを全日制課程から輩出した。

STEP 2

全日3年制のカリキュラムは、2年制からの移行当初は、若干、ゆとりもあったが、日々、進歩する医科学情報の増加や卒業生から次々にフィードバックされる不足点を新たに教科として組み入れていく中で、徐々に、窮屈さが増してきた。始業時間を早めるなどの工夫を行い、全日3年制で3300時間まで詰め込んだ。

STEP 3

紆余曲折を重ねながら創り上げてきたICCの全日3年制カリキュラム。ようやく自他共に認める国内最高水準のカリキュラムが出来上がった。しかし、ひとつ大きな問題があった。それは、臨床実習の時間が、十分に取れないこと。時間を割いても数週間。その打開策は、ひとつしかなかった。それは、4年制構想であった。

STEP 4

そんな中、2004年にWHO世界保健機関からICCへ要請があった。「鍼灸に続いて、カイロプラクティックの教育ガイドラインを作成するので日本代表校として国際会議に参加して欲しい」との内容だった。日本代表校としての選抜理由は、「未法制化の環境の中で20年に亘り、高度教育を推進し続けている事業姿勢を我々は高く評価している。貴校の教育プログラムに大変、興味がある。」との内容だった。会議参加の席上で「日本のICCの全日3年制プログラムに、あと1000時間の臨床実習を付加すれば、ほぼ世界基準に到達する。」と、参加国代表者らから、真に時を得た助言があった。

STEP 5

日本の療術から派生したICCの前進の創業以来、ゆっくりと時間を掛け、培ってきた無投薬非観血療法としての補完代替医療の教育プログラムが、世界の大舞台で日の目を見た。世界が日本の早期法制化を願っていることを実感しながら、かねてから抱いていた4年制構想を現実化させる決意が徐々に固まって行った。

STEP 6

全日制課程の開講から20年の時を経た2006年に、晴れて全日4年制(4500時間)を開講。悲願であった臨床実習の場が設けられ、4年目の学生たちは、外来患者と向き合い、臨床研鑽に励んでいる。今は、只々、この教育基準が、日本のスタンダードとなることを願うばかりである。

国際カイロプラクティックカレッジ(ICC)